

正月特集

編集長：坂内良明

編集委員：石井宏典 塩澤諒子

学んでから見る故郷のまち

帰省した院生4人が語るふるさと自慢

text_shiozawa

まちづくりを考えながら、全国さまざまな場所を見たり、訪れたりしている研究室のメンバーですが、その根っこは育った環境、地元の影響が大きいのではないのでしょうか。年末は少し、研究室が静かになって、地方出身メンバーはそれぞれ自分のふるさとへ帰省した人も多い様子。そこで、帰省したメンバーの何人かのふるさとを紹介します。

永瀬節治 D2



兵庫県西宮市

実家は一昨年、西隣の某市に転居したのでそこに一応、戻ってきました。そのついでに、最近なんと最低敷地面積400㎡を条例化しつつある六麓荘を歩いてきたのですが、大阪都心から神戸港、晴れば淡路島まで一望できる高台（実際のものすごい斜面）の緑の中に邸宅が埋まっている

感じで、まさに異空間（こんなトコに住む人、いるんですねえ）。しかし考えると、日本の沿線開発の先駆けは小林一三の阪急なわけで、「西宮七園」と呼ばれる戦前からの住宅地群もその流れだった。新宿落合をふと離れ、地元の住宅地の歴史に、あらためて思いを馳せるのでした。

後藤健太郎 M2



岐阜県大垣市

大垣城、奥の細道の終着地。長年暮らした大垣のまちですが、思い浮かぶのはこれだけ。古川・郡上八幡に比べて見劣りするとずっと思っていました。しかし久々にまちを歩いてみると、あちこちに歴史的な街路・水路・建造物が見受けられ、「城下町」としての風情が色濃く残っている

ことに驚きました。これもデザ研に入り、いろいろなプロジェクトを経験したことで、大垣を内からも外からも眺められるようになったということかもしれません。冬桜を見ながら、育ったまち大垣の良さを再発見したのでした。皆さん、是非遊びに来てください。

Nagase & Goto

お互いの実家の中間だから、というよく分からない理由をつけて、今年もまた、二人で冬の京都を訪ねて参りました。今回は松尾大社から嵐山に入り、嵯峨鳥居本の伝建地区を見て、嵐電に乗り北野白梅町へ。北野天満宮で学問成就を祈願した後、夜は例によって先斗町にて芳醇な一時を過ごしました。悠久の流れに身を浸しながら、京料理に舌鼓。やはり京都は格別ですね…。翌日は朝早く京都を立ち、三重県関宿へ。ちょっと立ち寄るつもりが、訪ねてみると、思いのほか味わい深い佇まいに、時を忘れて歩き回っていました。東海道唯一の伝建地区であり、町家の半数が保存対象なのですが、何より住民の意識の高さが随所に感じられたのが、大きな収穫でした。

コラム
～京都編～

恒例の冬の京、そして関宿へ

平林直 M1



長野県松本市

見所はやはり国宝松本城です。特に冬の澄み切った空の下、常念岳をバックに屹立する城の姿はとてもいい。明治維新時、解体の危機がありましたが私たちの高校の初代校長がその重要性を訴え市民とともに救った逸話があります。母校の校舎は、明治時代

松本城の中にありました。卒業生の誇りの城です。

九月には車を中心街乗入れ禁止し脱クルマ社会を目指す「カーフリーデー」に国内都市として始めて参加するとのこと。まちづくりの新しい試みを積極的に行う松本市。是非お越しを！



最近では伊東豊雄設計の松本市民芸術館ができ、毎夏、世界水準のオペラが演奏されます。その近くには宮本忠長設計の松本市美術館があります。市出身の草間弥生の作品が充実しています。

塩澤諒子 M1



群馬県前橋市

東京に来て山が近くに見えることが特に印象的だったのを覚えています。なにせ前橋は四方を山に囲まれて高い建物といたら32階建ての県庁が聳えるくらいですから。それと前橋は生糸の町としても知られていて、蚕糸業が盛んでした。周辺の農村も養蚕を営

み、紡績工場もありました。今回の帰省では近くの富岡市にある貫前神社に初詣に行きつつ、今、世界遺産登録を目指す八幡製糸場を見に行ってきました。今まであまり気づかなかった場所が新鮮に映るようになったのも、ここで勉強しているからだな、と思ったりします。



貫前神社は1400年の歴史があるらしいです。めずらしいのは参道を登った後、鳥居をくぐって、表門からまた降りて参拝するというところ。なんだか変な感じがしました。

ノスタルジックな憧憬をかき立てる空間装置として、のみならず、その普遍的な「身体性」「対人性」をもってすれば、路地は、20世紀型の都市計画に問題提起を行ない、新しい都市計画、都市空間のかたちを導き出す「羅針盤」にもなり得るのではないか。

西村教授の格調高い序説を敷衍する「第一部 路地の復権」では、路地の特性と魅力、形成の諸相が扱われ、「第二部 路地からのまちづくり」では、全国11のまちの事例を紹介している。「第三部 路地を活かすために」では都市計画関連法規や防災の立場から、路地を保全・活用するまちづくりの技法の構築が試みられており、包括的な路地論として、バランスの取れたつくりになっている。



2006年12月発行/学芸出版社
西村幸夫編著（著者に、都市工学専攻の小泉秀樹助教教授など）
¥3,000-
（研究室内特価¥2,400-）

昨年の12月18日に博士請求論文の審査会を終えました。審査会の開催にあたり、主査の西村先生をはじめ、副査の先生方、中島助手、そして何よりも聴講に駆けつけてくれた研究室の皆様にご心より御礼申し上げます。

私の研究テーマは、「米国における主として摩天楼を対象とした建物形態規制の成立と変遷に関する研究—シカゴ及びニューヨークの事例から」です。アメリカを代表する両都市では、19世紀末頃から建物の高層化がエスカレートし、建物形態規制が検討され始めました。そして大恐慌や二つの戦争など、社会が大きく変化する中で建物形態規制を巡る考え方も大きく変わりました。本研究では、現代的な形態規制のフレームが整う20世紀中頃までを対象に、新聞や雑誌記事、報告書等を紐解き、両都市における形態規制の根源の根拠を主に検証しました。

さて、私はサラリーマンとして働く傍らこうした研究活動を行って参りました。仕事が終わってから始まる日々の研究はなかなか思うように進みませんでした。自分自身

が最も知りたかった題材をテーマに研究が出来た幸せをつくづく実感しています。欧米には、ロンドンやモントリオールなど、同様のテーマで研究してみたい都市が幾つかあります。また、近いうちにこれらについても研究を進めたいと考えています。

記者は、3・4年前、とある会で坂本氏と一緒したことがある。お仕事を終えてから、あるいは、休みの土・日に、疲れの色を見せる風もなく会に参加して議論・作業するそのエネルギーに、驚いたものだった。発表を終えてなお、次なる題材に意欲を燃やす氏の姿勢には、全く頭の下がる思いがする。「知りたかった」ことを調べる「幸せ」こそが、研究の最も正統なモチベーションなのだ、ということに改めて気づかされた。

bannai

2007.1.22研究室会議

- <修士2年>
西原まり 「地域資源としての空き家の利活用システムに関する考察」
- <修士1年>
横田俊介 「夜間景観形成に伴う地域の景観意識向上効果に関する研究」
- 筒井奈央 「米軍接收地の特殊性とその跡地利用に関して」
- ファズリ・ビンズビ
「Designing for a New Urban Image
Odaiba Waterfront City's Urban Design approach」

中島助手、縦横無尽

text_bannai

博士論文後も、変わらぬ生活スタイルで走り続ける中島直人助手。まずは、2006年12月号の雑誌『10+1』。特集「都市の危機／都市の再生 アーバニズムは可能か？」において、「中心市街地活性化」のアーバニズム」と題して、地方都市の中心市街地活性化へ向けてのマニフェストを発した。のみならず、同特集「歴史的港湾都市・瀬の浦再生の「まちづくり」の生成」では、鈴木智香子M2と共著で、2006年度の「空き家調査」に基づいた地域の空洞化、車のまちを揺るがす埋め立て架橋問題を紹介しながら、都市デザイン研究室が支援してきた住民たちのまちづくり活動をたどった。

今年の1月17日には、大学院英語講義・都市計画論Eにおいて、西村教授の出張不在を衝いて登場。「Urban Spatial Heritage and its Preservation in Tokyo」と題した講義を行なった。豊富な保全活用の実例を紹介したパワーポイントは、100分の講義に到底収まりきらず、西村教授の「次の不在」を期して、終わりとなった。

さらに1月20日、「町田市景観まちづくり講座」の場で、「景観まちづくりの課題と展開」と題した講演を行っていたことが、後日、研究室の机に残されたレジュメから明らかになった。

公私にわたって絶好調の中島助手から、目が離せない。



■大学院講義・都市計画特論Eの様態
留学生中心に20名ほどの聴衆

星野OB + レイOG 結婚パーティー@レモン

D3 田中暁子
(本紙囑託・祝事担当)

2007年1月21日に開催された星野君とレイさんの結婚報告会に、新旧助手陣、ご両人の同期、先輩、合計40名近くが集まりました。会場は御茶ノ水のトラットリア・レモン、、、そうです。あの「レモン画翠」のレストランです。窪田先生の乾杯の音頭に始まり、ガムでの結婚式のスライド上映あり、こっそり用意したケーキ入刀あり、お二人が築いていく笑顔の絶えない明るい家庭を予感させるアットホームな会でした。

■2度目？のケーキ入刀

次号予告

- 見よ、2年の研究成果！—修論発表会ルポ
- 巨艦、堂々入港す
—京浜シンポジウムの盛況
- ゆきゆきて、新宿
第一クール修正のあとに続くお仕事は…

見出しはいずれも仮題です。
次号は、2月10日発行予定。

編集後記

text_bannai

熱狂的な相撲ファンだった小学生時代、「八百長」報道を聞いたときは目の前が暗くなるようなショックを受けた。今では、「あるんだろうね」といった諦め混じりで、のったり、ときどき、観戦する位だ。直情を、時を経てあため続けることは、難しい。就活。

